

〈講演〉

オランダ絵画の「黄金時代」

吉城寺 尚 子

【要旨】

オランダ絵画は17世紀に黄金時代を迎える。その背景として、ヨーロッパにおける地理的世界観の拡大、宗教改革運動とその影響、オランダのスペインからの独立と海路を通じた世界展開が挙げられる。黄金時代のオランダ絵画の特色は、富裕市民層の需要に応えるための主題やサイズ、科学の発達による技法や表現にある。また、人の内面や心理への関心とその表現とに新しさがありながらも、写實的・現実再現的の画面の中に中世以来の寓意や象徴が存在しているところにある。20世紀後半以来、科学的手法によるオランダ絵画研究が活発に行われている。近年の展覧会では、AIを利用したレンブラント《夜警》の復元や、改変されていたフェルメール作品の復元と日本におけるその初公開などが話題になった。

キーワード：オランダ絵画、黄金時代、17世紀

1. はじめに

佐倉日蘭協会より、オランダ美術に関する講演の依頼をいただきました¹。オランダの美術というと、まず17世紀のフェルメールやレンブラントの名作が思い出されます。または、オランダ出身の画家フィンセント・ファン・ゴッホの作品、または、20世紀のピート・モンドリアンの抽象画、または、ディック・ブルーナのミッフィーちゃんあたりがよく知られているでしょうか。

やはりオランダ美術といえば、17世紀絵画とその巨匠たちについてのお話を、と思います。が、フェルメールやレンブラントの生涯や制作については、日本でもよく紹介され、知られているところだと思います。そこで今回のお話は、なぜこの時期に、これほど優れた芸術家たちが出てきて優れた作品を残したのか、その点を考える材料を提供するような内容を、次の3点の話題として組み立ててみました。

1. オランダ絵画が17世紀に「黄金時代」を迎える歴史と社会の背景
2. 美術史の文脈から見た「黄金時代」のオランダ絵画とその特色
3. 近年の研究と展覧会紹介

2. オランダ絵画「黄金時代」の成立前史

2.1 地理的世界観の拡がり

中世ヨーロッパの世界観

中世ヨーロッパの人々は「世界」を、アジア・アフリカ・ヨーロッパという三つの大陸とそれを分ける水域、三大陸をとりまく大洋から成ると考えていました。この世界像を図にすると、円形の中をT字状に区切る、素朴な世界地図が出来上がります。

古くはセビリャの修道士イシドルスの著作（7世紀）の挿絵に出てきます。アルファベットのTとOを組み合わせた形なので、TO図と呼ばれています。中心にエルサレムを置き、ヨーロッパのキリスト教徒にとって聖地の方向である東を上にはしています。

1300年頃の制作と言われる「ヘレフォード世界地図」においても、円形世界を囲み、区切る水域は概ねTO図のかたちを基本にしており、エルサレムを中心に置き、東を上にはしているので、上側がアジア、左側がヨーロッパ、右側がアフリカになっています。

東方への憧れ

この頃、ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロが東方へ大旅行を行い、『東方見聞録』を口述著作しました。日本についても「ジパング」として記述されていることはよく知られています。ただし、マルコ・ポーロは実際に日本に足を踏み入れたわけではなく、まさに「幻想の東洋」とも言える想像力にあふれた伝聞を記しています。スライドは、マルコ・ポーロの旅行ルートです。往路はアンティオキアからアジア大陸を陸路で東へ進んでいます。

15世紀にドイツで出版された、ハルトマン・シェーデルの『世界年代記』には、TO図よりは現実に近い世界地図が印刷されていて、この地図は北を上にはしています。ただしこの本にも、世界の果てには人とも獣とも怪物ともつかないような種族が住んでいるとして、奇妙な身体をもつ幻想的な種族の図が描かれています。

このような幻想的イメージに満ちた「東方の異国」は「インド」と呼ばれていました。中世史家の池上俊一氏は『西洋中世綺譚集成 東方の驚異』の「まえがき」の中で、次のように述べています。「中世において、「東方（オリエント）」は、「インド」と呼ばれていたが、その概念は融通無碍にして、伸縮自在であった。もっと言えば、「インド」は現在のインドをふくむアジア一帯ばかりか、中近東はたまたアフリカ（とくにエチオピア）あたりの広い地域をさすものとして認識しておく必要がある」²

海路の開拓と大航海時代（15～17世紀）

マルコ・ポーロは主として陸路で東方を目指しましたが、やがて西ヨーロッパの人々は、東方世界に向けて海のルートを切り拓いていきます。

1488年、バルトロメウ・ディアスはアフリカ南端に到達。1498年、バスコ・ダ・ガマはア

フリカの南岸を回りインドのカリカットに到達。一方クリストファー・コロンブスは1486年、西方に向かって西インド諸島に到達し、西回りのインド航路を発見したと考えていました。1519年、マゼランも西回りでインドを目指し、1521年にフィリピンに到着します。マゼランはここで落命しますが、部下たちが航海を続け、1522年にスペインに帰港して世界周航を果たし、地球が丸いことを証明しました。

航海に出れば、陸地のような土地の目印はありません。大海原で自分の位置や進む方角を知るために、天文観測の技術や羅針盤のような道具、地図（海図）制作術が発達しました。地図は北を上にするのが一般的となり、世界地図には新大陸も描き込まれるようになります。

2.2 プロテスタント改革とその影響

カトリック世界の改革運動（14～16世紀）

ヨーロッパの人々の世界観・世界像がこのように広がっていった中世末期から近世初期は、ヨーロッパのカトリック世界が大きな変革を迫られる時期でもありました。

ローマ教皇を頂点とするカトリック教会に対して、14世紀から16世紀にかけて、ローマに対して北方に位置する地域から改革を唱える改革者が輩出します。イングランドのウィクリフ、ボヘミアのフス、ドイツのルター、スイスのカルヴァンたちです。

ときには過激な戦争や迫害へと傾いた改革運動の中で、オランダ（ネーデルラント）の状況はどうだったかという、急進的なプロテスタント革命のような事態には至りませんでした。「Devotio Moderna（新しき信心）」と呼ばれる穏健な思想的変革が、カトリック教会の内側にも穏やかな変革をもたらしていたようです。百科事典の「福音主義」の項目から引用しますと、「……すでに中世以来キリスト中心の生き生きとした内面的信仰を復活させようとする〈新しき信心 Devotio moderna〉の運動がネーデルラントから北フランスにかけて広まったが、その影響下に育ち、人文主義的方法をも身につけたエラスムスやルフェーブル・デターブルは、従来教会が顧みなかった聖書のヘブライ語・ギリシア語原典や古代教父文学の再検討を通じて、新しいキリスト信仰のあり方を求めようとした。」とあります³。

カトリック教会の「対抗宗教改革」

このような改革運動に対するカトリック教会の反応は、「対抗宗教改革」として知られています。トリエント公会議の開催がその代表的事業でしたが、この時代に見出された新世界へのカトリック布教も奨励されました。海路を東方へというルートで、ジェズイット会（イエズス会）のフランシスコ・ザビエルにより、日本にキリスト教が伝えられたことは、よく知られています。新大陸へもカトリックは布教され、ラテンアメリカ世界には、豪華なバロック様式の聖堂建築や宗教美術の様式が移植され、土地の芸術様式とも結びつき、のちに「ウルトラバロック」と呼ばれるようになる独特の美術が展開します。

2.3 オランダの独立と世界への展開

スペイン（カトリック）からの独立

いわゆる「大航海時代」の前半期は、ポルトガルとスペインが新世界に向かってその勢力を伸ばしていきます。そしてスペインの支配下にあったネーデルラントの北部（オランダ）は、スペインからの独立を果たすことで「黄金時代」を迎えることとなります。

1479年、アラゴン王国とカスティリヤ王国の合併によりスペイン王国が成立します。この頃、ブルゴーニュ公国領だったネーデルラント地方は、1477年にブルゴーニュ公4代目となるマリーが継承します。同年マリーは神聖ローマ帝国皇帝のマクシミリアン1世（ハプスブルク家）と結婚し、マリー没後にネーデルラントはハプスブルク領になります。二人の孫のカール5世は神聖ローマ皇帝とスペイン王を兼ね、カール退位後にネーデルラントはスペイン領となります。カール5世の子フェリペ2世はスペイン王位を継ぎますが、峻厳なカトリック教徒であったフェリペ2世は、カルヴァン派などネーデルラント地方のプロテスタントを、異端審問により迫害します。ネーデルラントはフェリペ2世に対して反乱を起し、長い独立戦争のあと、ネーデルラント北部7州は1648年にスペインからの独立を果たします。

スペインの国力はフェリペ2世時代を最後の頂点として下り始め、大航海時代の後半期はオランダやイギリス、フランスが世界へ進出していきます。このような歴史を背景として、オランダの17世紀は経済力、軍事力、科学技術、芸術が高度に発展し、「黄金時代」と呼ばれることとなります。

3. オランダ絵画の黄金時代、17世紀

中世〜ルネサンス転換期（15世紀）

オランダ絵画が17世紀に黄金時代を迎えるにあたり、絵画史におけるその「源流」を見てみましょう。

ルネサンス期のイタリア絵画は、15世紀初頭に大きな変貌を遂げましたが、ほぼ同じころ、アルプス山脈を挟んで北側となるネーデルラント地方でも、絵画に革新的な変化がありました。

15世紀当時、ブルゴーニュ公国の宮廷画家だったヤン・ファン・エイクは、驚異的な描写力を示す作品を残しています。物の質感を徹底して細密描写する「写実」は、絵画平面上に空間と奥行きを現出させるイタリアの新技法とは、ある意味で対極をなしています。見ているとめまいがしてくるようなヤンの細密表現は、彼が完成したとされる油彩技法と表裏をなしています。油彩画の技法は、北方（アルプスの北）からイタリアに伝わり、ルネサンス期以後の絵画の主要な技法となっていきます。ヤンはリアルな肖像画の名手でもありましたが、モデルは中世以来の真横向きではなく、斜めを向いています。四分の三向きというこの表現も、北方からイタリアに影響を与えました。

ロマネスト（16世紀）

16世紀になると、ネーデルラントの絵画は逆にイタリアから強く影響を受けるようになります。イタリアでは15世紀末から16世紀初頭にかけて、いわゆる盛期ルネサンス美術が頂点を迎えますが、その後の絵画は「マニエリスム」と呼ばれるようになる、古典的ルネサンス様式が爛熟したようなスタイルになっていきます。ネーデルラントでは、ローマに留学して古代美術やイタリア・ルネサンス美術を研究する画家たちが出てきて「ロマネスト」と呼ばれるようになります。が、その作品はむしろ同時代のマニエリスムに引っ張られているようにも感じられます。

カラヴァジズム（17世紀）

そして17世紀、イタリアでは1590年代からカラヴァッジョの作品が知られるようになります。カラヴァッジョは1610年に40歳手前で亡くなるまでの激しく短い人生の中で、写実と強烈な明暗表現を特徴とする作品を多数残し、人々に強い印象を残しました。暗い舞台上で強いスポットライトが当たっている芝居の一場面のような画面構成で、娼婦や貧しい老人をモデルに聖母や聖人を描く写実。その強烈なスタイルは注文主が引き取りを拒むようなスキャンダルを起こす一方、イタリアのみならず、フランドル、オランダ、フランス、スペインなどの画家たちに大きな影響を与え、カラヴァッジョ様式の模倣者たち—カラヴァジェスキを輩出しました。オランダでは特に、ユトレヒトで活動する画家たちにこの傾向が見られ、「ユトレヒト・カラヴァジズム」と名付けられています。

カラヴァジェスキたちの作品とカラヴァッジョの作品を比べてみましょう。ディルク・ファン・バビューレンの「荊の戴冠」【図1】とカラヴァッジョの「荊の戴冠」【図2】です。カラヴァッジョのキリストを左右反転させると、ファン・バビューレンのキリストの姿勢になります。一方、荊冠をキリストの頭に棒で押しつけている二人の男の姿勢と棒の位置は、ファン・バビューレンにほとんどそのまま受け継がれています。画面左側に、鎧を着けた男がいるのも同じですね。



図1



図2

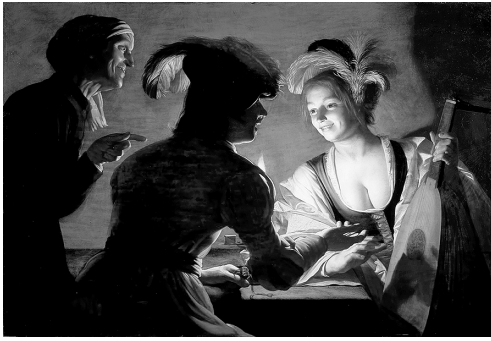


図 3

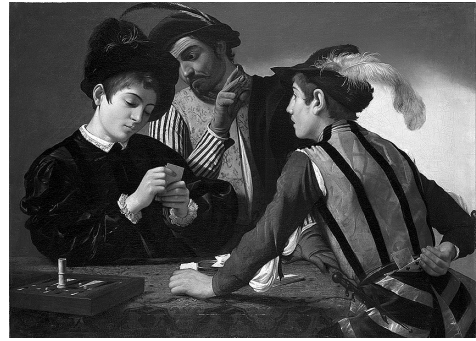


図 4



図 5

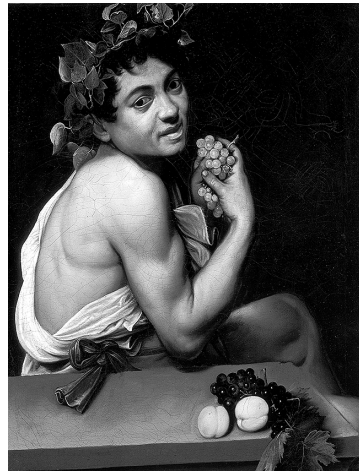


図 6

次は、ヘラルト・ファン・ホントホルストの「取り持ち女」【図3】です。ホントホルストはろうそくの光による明暗を効果的に使った作品をよく描いています。ここではカラヴァッジョの「トランプ詐欺師」【図4】と比べてみましょう。光の使い方は全く違いますが、カモにされる若い男と彼を騙す二人、という三人組の構図です。そして、ヘンドリック・テルブルッヘンの「バッカスの信女と猿」【図5】とカラヴァッジョの「病んだ若いバッカス」【図6】。前者は後者のオマージュでしょうか。

「黄金時代」の結実

17世紀オランダ「黄金時代」絵画の特徴を見てみましょう。オランダは裕福な市民が中心の社会が絵画芸術を支えました。主要な注文主は、カトリックの豪華な教会でもなければ、絶対王政の王侯貴族でもありません。したがって、絵画の主題は世俗的な主題が中心となります。大画面の歴史画や宗教画の需要は少なく、肖像画といえば市民の肖像画で、特徴的なのは大画面の集団肖像画【図7】です。フランス・ハルスはこの作品は優れた作品だと思いますが、レンブラントの「夜警」【図8】が集団肖像画として注文された作品であると知ると、いかに



図 7



図 8

後者が斬新なものであったかがよくわかります。

絵画ヒエラルキーの下位ジャンルの風俗画、風景画、静物画は多数制作されました。風景画の中でも海と船を描いた海景画は、黄金時代を代表する特徴的なジャンルと言えるかもしれません。大航海時代に世界の海に進出したオランダでは、海景画は当然好まれました。ルドルフ・バックハイゼンの「ジブラルタル沖で嵐に遭うオランダ軍艦」【図9】は、実際に起きた事件を描いています。が、実は船は昔から、キリスト教会や世の中、人生の象徴として描かれてきたモチーフです。フェルメールの風俗画「恋文」【図10】の室内にも帆船の絵がかけられています。海景画は実際の市民の部屋でもこのように飾られていたのでしょうか、恋文を読む女性の、嵐のような心情の暗喩だという説もあります。ガラス器や銀器、食物の質感描写に優れた静物画も数多く描かれました。

これらの風俗画、風景・海景画、静物画には大作もありますが、市民の居室に飾るのにちょうど良い小品が多い。そして海景なら海景画家、静物なら静物画家というように、制作者の専門化と多作化が進みます。売る形態も注文制作から、特に独立戦争後は絵画市場が活発化していきました。



図 9

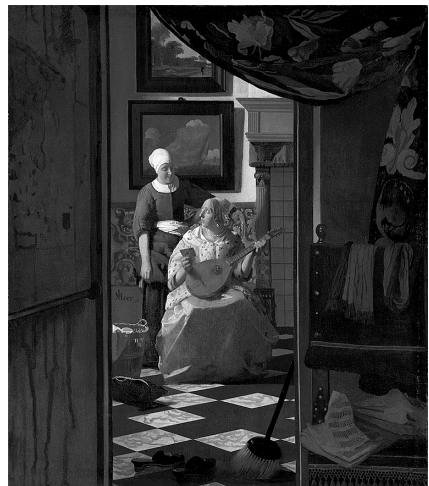


図 10

絵画を「本物そっくり」に描くための技法と様式は、科学技術の発達とともに進んできました。遠近法・透視図法や写真術は、「本物そっくり」の絵画を生み出そうとして生まれた技術と言えるかもしれません。フェルメールをはじめ17世紀オランダの画家たちが、カメラ・オブスクーラのような光学装置を使って制作したかどうかは、はっきりしないようです。が、この時代、ファン・エイクの的な意味とは違う「本物そっくり」に見える写実が一つの頂点を迎えたことは確かでしょう。

ヤン・ファン・エイクの自画像と言われる肖像画【図11】はどこまでも細密に、例えば目は白目、虹彩とその文様、瞳孔、光の反射まで描き込まれています。一方、レンブラントの「使徒パウロに扮した自画像」【図12】の筆致はかなり粗く、黒目はざっと塗りつぶされているだけのように見えます。にもかかわらず、レンブラントの表情は「慎ましい憂鬱」「問いかけるような眼差し」「諦め」「悟り」「悲哀」⁴など、明確には定めることのできない、とても人間的な内面が感じられます。



図11



図12

そして黄金時代のオランダ絵画は、「市民社会のための」「日常世界に根ざした」作品であっても、寓意や象徴や伝統がそこに共存しています。

ニコラース・マースの風俗画【図13】は、居眠りしている家政婦と混乱した台所を描き、日常生活の描写というよりは「怠けていると、このようになってしまいますよ」という教訓を示した風俗画になっています。さらに言えば、中世のキリスト教で定められた「七つの大罪」の一つ「怠惰」は、居眠りをする人の図像で表す前例が、ネーデルラント絵画にありました【図14】。



図13



図14

ピーテル・クラスゾーンの静物画【図15】は、髑髏、火の消えたランプ、傾いて壊れそうなグラスなどが配置され、意味するところは明らかです。このような主題は「Vanitas」と呼ばれ、この世の富や快樂の虚しさ、生の移ろいやすさを表しています。これは中世以来ヨーロッパのキリスト教世界に広まった「Memento Mori (死を思え)」という思想と図像とにつながっており、さらに古典古代にルーツを求めることができます。

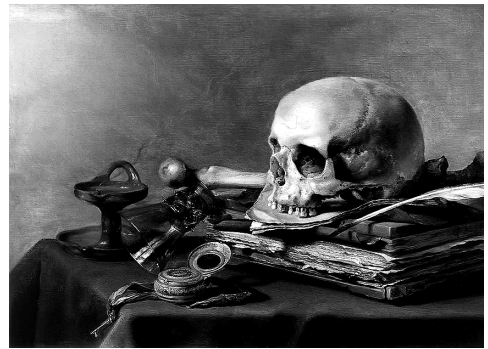


図15

フェルメールの「画家のアトリエ」または「絵画芸術」と呼ばれる作品【図16】は、「絵画」の寓意像に扮装したモデルを、画家がアトリエで描いている、という絵です。絵画のジャンルで言えば、画家の日常を描いた風俗画のように見えます。とても写実的に描かれていますが、明らかに現実描写ではありません。つまりこの絵は、絵画の寓意像を描く画家（おそらく自画像）の後ろ姿という絵画を描くことにより、「絵画芸術」という寓意を絵画で表現しているのですね。めまいがしてきました。



図16

そこまで複雑ではない、レンブラントの肖像画の例【図17】をお見せしましょう。「売春宿の放



図17

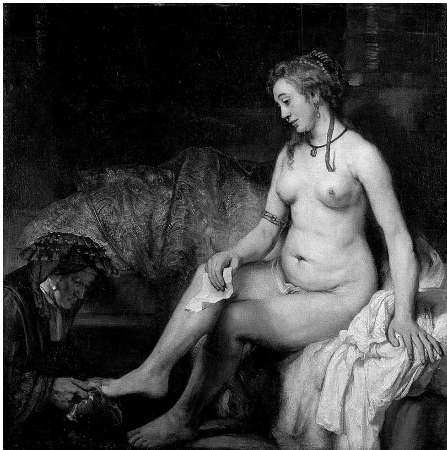


図18

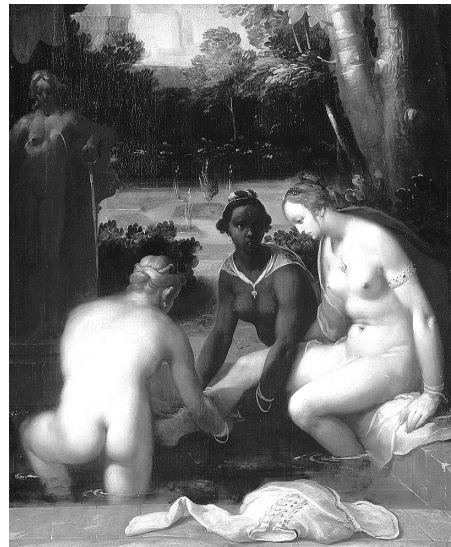


図19

蕩息子」または「サスキアのいる自画像」です。放蕩息子のたとえ話は、新約聖書のルカ伝（第15章11-32節）に出てきます。話の本意とは全く別に、酒場のどんちゃん騒ぎを描く風俗画の主題として、よく利用されます。それらの作品とも違い、レンブラントは自分を放蕩息子に、新婚の妻を酒場の女性に見立てた二重肖像画に仕立てています。図像的な主題のいかがわしさ（たとえ話自体は、神の憐れみ深さを説くありがたいお話です）にもかかわらず、陽気で楽しげな自画像になっています。

レンブラントは旧約聖書（サムエル記下第11章）に登場するバト・シェバの水浴【図18】も描いており、こちらは二番目の妻ヘンドリックエがモデルであると考えられています。が、同じ主題を描いた16世紀の作品【図19】に、ポーズやアクセサリがそっくりの前例があり、この絵と関係が深いのではと想像しています。

4. 結び 近年のオランダ絵画研究

フェルメール作品が35点ほどしか残されていないのに比べ、レンブラント作品は素描・版画も含め膨大な数にのぼります。レンブラント絵画作品については、1968年から、世界中のレンブラント絵画作品を検討し、同定について判断を下すという壮大な「レンブラント・リ

サーチ・プロジェクト」が始まりました。これは2014年に完結し、6巻のコーパスにまとめられました。

1980年代頃からは、さまざまな科学的調査が盛んに行われるようになり、近年はAIを利用した研究が進んでいます。

レンブラントの「夜警」は、18世紀に作品の四方、特に左側が大きく欠損してしまったのですが、17世紀に描かれた模写をもとに、AIにレンブラントの技法と色彩を学習させて欠損部分を復元し、2021年に展示発表されました⁵。

また、ドレスデンの美術館が所蔵するフェルメールの「窓辺で手紙を読む女」は、1979年のX線調査で、壁面が塗りつぶされていることがわかっていました。2017年から21年にかけての調査で、塗りつぶしはフェルメール自身によるものでないことが判明し、塗りつぶし層が取り除かれました。すると大きなキューピッドの絵が現れ、作品の印象が一変しました⁶。

みなさんはどういう印象を持ったでしょうか。私はシンプルな壁面を見慣れていたので、急に画面の情報量が多くなり、少し違和感を持ちました。でも、シンプルな画面のほうが美しいというのは近代の感覚で、フェルメールが描いたオリジナルが17世紀オランダの市民の家の雰囲気なのでしょう。

このキューピッドには見覚えがあり、探したらロンドンの美術館にもいました【図20】。ということは、いずれにせよ、この空間もフェルメールの作事の世界なのですね。



図20

【注】

- 1 本稿は2022年8月28日、佐倉日蘭協会主催の「オランダ事情講演会」の一環として、佐倉市立美術館にて行われた講演をもとに再構成した。
- 2 池上俊一「はじめに 「インド」の幻想」『西洋中世奇譚集成 東方の驚異』講談社（学術文庫）2009年。
- 3 “Devotio Modernaとは？ 意味や使い方.” コトバンク, kotobank.jp/word/Devotio%20moderna-1229079. Accessed 25 Oct. 2023.
- 4 “使徒パウロに扮した自画像.” Wikipedia, Wikimedia Foundation, ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E4%BD%BF%E5%BE%92%E3%83%91%E3%82%A6%E3%83%AD%E3%81%AB%E6%89%AE%E3%81%97%E3%81%9F%E8%87%AA%E7%94%BB%E5%83%8F&oldid=94695953. Accessed 25 Oct. 2023.

- 5 “レンブラントの《夜警》、300年ぶりに本来の姿に。AIで欠損部分を復元。” 美術手帖, 24 June 2021, bijutsutecho.com/magazine/news/headline/24226.
- 6 “Vermeer.” Gemäldegalerie Alte Meister: Vermeer, gemaeldegalerie.skd.museum/en/research/vermeer/. Accessed 25 Oct. 2023.

【挿図リスト】

- 1 デイルク・ファン・バビューレン「荊の戴冠」1622年、聖カテリーナ修道院博物館（ユトレヒト）
- 2 カラヴァッジョ「荊の戴冠」1602-07年頃、美術史美術館（ウィーン）
- 3 ヘラルト・ファン・ホントホルスト「取り持ち女」1625年、中央博物館（ユトレヒト）
- 4 カラヴァッジョ「トランプ詐欺師」1595年、キンベル美術館（フォートワース）
- 5 ヘンドリック・テルブルッヘン「バッカスの信女と猿」1627年、ゲッティ美術館（ロサンジェルス）
- 6 カラヴァッジョ「病んだ若いバッカス」1593年、ボルゲーゼ美術館（ローマ）
- 7 フランス・ハルス「ハーレルムの聖ゲオルギウス市民隊幹部の宴会」1616年、フランス・ハルス美術館（ハーレルム）
- 8 レンブラント「夜警（フランス・バニング・コック隊長の市警団）」1642年、国立美術館（アムステルダム）
- 9 ルドルフ・バックハイゼン「ジブラルタル海峡で嵐に遭うホランダディア号、1694年の事故」1708年、国立美術館（アムステルダム）
- 10 フェルメール「恋文」1669-70年頃、国立美術館（アムステルダム）
- 11 ヤン・ファン・エイク「赤いターバンの男の肖像」1433年、ナショナルギャラリー（ロンドン）
- 12 レンブラント「使徒パウロとしての自画像」1661年、国立美術館（アムステルダム）
- 13 ニコラース・マース「怠け者の召使い」1655年、ナショナルギャラリー（ロンドン）
- 14 伝ヒエロニムス・ボス「七つの大罪」（部分）1500年頃、プラド美術館（マドリッド）
- 15 ピーテル・クラス「ヴァニタス」1630年、マウリッツハイス美術館（デン・ハーグ）
- 16 フェルメール「絵画芸術（画家のアトリエ）」1666-67年、美術史美術館（ウィーン）
- 17 レンブラント「娼家の放蕩息子（サスキアのいる自画像）」1635年頃、エルミタージュ美術館（サンクト・ペテルスブルク）
- 18 レンブラント「バト・シェバの水浴」1654年、ルーヴル美術館（パリ）
- 19 コルネリス・コルネリスゾーン・ファン・ハーレルム「バト・シェバの化粧」1594年、国立美術館（アムステルダム）
- 20 フェルメール「ヴァージナルの前に立つ女」1672-73年頃、ナショナルギャラリー（ロンドン）

The “Golden Age” of Dutch Painting

Naoko Kichijoji

Abstract

Dutch painting entered its golden age in the 17th century. This was due to the expansion of the geographical worldview in Europe, the Reformation movement and its influence, and the independence of the Netherlands from Spain and its global expansion through sea routes. Dutch painting of the Golden Age is characterized by subjects and sizes that meet the demands of the affluent citizenry, and by techniques and expressions that reflect the development of science. In addition, while there is a new interest in the inner life and psychology of people and their expression, there are allegories and symbols that have existed since the Middle Ages in the realistic paintings. Recent exhibitions based on scientific research have included the AI-based restoration of Rembrandt’s “The Night Watch” and the restoration of an altered Vermeer work and its first public showing in Japan.

Keywords: Dutch painting, the golden age, 17th century